

文化十	五月魯船來リテ昔年ノ寇役ハ國主ノ意ニ出ツルニアラサルヲ謝シ互ニ四處ヲ返サント乞フコトヲ許ス九月魯船松前ニ來リ四人ヲ換ヘテ去ル	四月宇田川玄眞翻譯局ノ譯員トナル尋テ將軍ニ謁ス馬場佐十郎命セラレテ松前ニ往キ魯囚ニ就キテ魯語ヲ學ブ十月新宮涼亭長崎ニ遊學ス	林洞海生江戸人
癸酉			
甲戌		伊能勘解由再西海道沿海實測ノ舉ヲ起シテ去年九月長崎ニ至リ今歲ニ至リテ遂ニ其功ヲ終フ前後十八年ニシテ全國ノ實測圖始テ成就セシト云フ	十月熱病論刻成
同十一			
同十二	九月和蘭貢使トウフノ子次吉ヲ長崎町年寄ニ支配トス「トウフ」長崎ニ居ル十七年頗邦語ニ通セリ諸譯官相議シテ彼此對譯ノ辭書ヲ撰セリ	譯官吉雄後藏致仕シテ江戸ニ來ル後尾張藩ニ聘セラレテ常庵ト改名ス杉田玄白年八十三蘭學ノ興隆ヲ見テ昔年ノ苦辛ヲ書シ蘭學事始ト名ケテ玄澤ニ與フ	日本沿海實測圖成
乙亥			
丙子		大槻玄幹常ニ和蘭文法ノ説ヲ講シ蘭學凡ヲ著シテ詞品語格ヲ述フ是ヲ文法書ノ初トス	四月蘭學事始成
同十三			
同十四	九月仁孝帝即位	十月高良齋長崎ニ遊學ス	春蘭學凡成
丁丑			四月十七日玄白歿年八十五十一月十一日杉田成卿生立卿ノ子
二四七七 一八一七			

文政元	五月英船浦賀ニ來リ尋テ去ル	伊東玄朴長崎ニ遊學シ尋テ歸郷ス坪井信造江戸ニ來リテ宇田川玄眞ノ門ニ入ル時ニ年二十四	十月廿一日江漢歿年七十二
戊寅		馬場佐十郎命ヲ奉シテ浦賀ニ行キ英人ヲ諭シテ返ラシム	
己卯	二月浦賀奉行ヲ二員トス	四月本木莊左衛門名村八右衛門兼譯官ノ教授ヲ命セラル	
同二年			
同三年		正月大槻玄幹西音發微ヲ著シテ西洋音韻ヲ漢字音ニ配合ス又西韻府ノ著アリ秋高野長英江戸ニ來リテ吉田長淑ノ門ニ入ル戸塚靜海モ亦來リテ宇田川玄眞ノ門ニ入ル	
庚辰		伊能勘解由日本沿海實測圖並行程錄ヲ獻納ス馬場佐十郎魯囚カ著セル遭厄日本紀事ヲ譯ス	
二四八〇 一八二〇		伊藤圭介京師ニ至リテ藤林泰介ノ門ニ入ル十二月玄眞泰介再解剖ノ舉アリ	
同四年	十二月蝦夷地ヲ松前氏ニ返シ賜ヒテコレヲ鎮セシム	八月杉田立卿青地林宗翻譯局ノ譯員トナリテ遭厄日本紀事ヲ續譯ス小關三英佐々木中澤仙臺醫學ノ教員ニ聘セラヌ箕作阮甫江戸ニ來リ宇田川玄眞ノ門ニ入ル	八月増譯内科撰要刻成
辛巳			七月廿七日佐十郎歿年三十六
二四八一 一八二二			
同五年			
壬午			
二四八二 一八二二			

文政六	八月普魯士醫員シイホルト和蘭醫官トナリテ長崎ニ來ル醫術及物産學ニ長セリ四方ヨリ遊學スル者皆就キテ其學術ヲ直傳ス醫療ノ法是ヨリ一變セリ	十一月觀衆圖說	刻成	
癸未	七月英船薩摩ノ寶島ヲ擄ス	八月天文方足立左内魯西亞學堂譯文ヲ上ル		八月十日長淑歿年四十六
同七年		戸塚靜海長崎ニ遊學ス蓋師命ヲ得テシイホルトニ從學ス伊東玄朴モ亦再遊シテ同氏ノ學ヲ受ク		
甲申		八月高野長英長崎ニ遊學ス	十月遭厄日本紀事譯成	
同八年	外國船ノ沿海ニ來ル者ハ悉コレヲ擊テ却クシム特ニ號旗ヲ和蘭ニ與ヘテ他船ト誤ル事ナカラシム	九月伊東玄朴長崎ヨリ江戸ニ來リテ開業ス		
乙酉		伊東圭介長崎ニ遊學ス		
同九年	三月和蘭來賓醫官「シイホルト」隨行シテ江戸ニ至ル	伊東圭介名古屋ニ歸リテ始テ物産學ヲ以テ開業ノ舉アリ	七月重訂解體新書刻成	
丙戌		青地林宗萬國輿地誌ヲ譯述ス	西音發微刻成	
同十年		伊東圭介長崎ニ遊學ス	七月氣海觀測刻成	三月晦日玄澤歿年七十一
丁亥		青地林宗萬國輿地誌ヲ譯述ス		
二四八七				
二四八八				

同十一	九月九州大風ニテ蘭船破損ス日本地圖等雜品ノ中ニ在リ十一月シイホルトノ獄起	高橋作左衛門日本地圖ヲ「シイホルト」ニ與フルヲ以テ獄ニ下ル	泰西西方鑑刻成	
戊子		小森玄良醫術盛ニ行レ洋藥調劑ノ法ヲ類聚シテ泰西方鑑ヲ撰ス是歲正六位下ニ叙ス		
同十二	九月シイホルト「ナ其國ニ放逐シテ再來ル勿ラシム」後三十二年ヲ歷テ橫濱及江戸ニ來レリ	正月高直齋等「シイホルト」ノ連坐ニ達ヒテ長崎ノ獄ニ下ル尋テ赦免セラル		十一月橋本宗吉刑死ス
己丑		坪井信道江戸ニ開業ス		
二四八九		橋本宗吉邪教ニ連坐シテ殺サル		
一八二九		高野長英江戸ニ開業ス		
天保元	三月天文方高橋小太郎ヲ流シ下河邊林右衛門ヲ追放シ五月長崎譯官吉雄忠次郎馬場爲八郎ヲ永禁ス皆シイホルトノ獄ニ連坐セシ者ナリ	川本幸民江戸ニ來リ坪井信道ノ門ニ入ル時年二十一		
庚寅		足立長舊醫方研幾ヲ著シ又西洋ノ產科術ヲ唱ヘ出セリ		
二四九〇		戸塚靜海江戸ニ開業ス		
一八三〇	七月英船蝦夷地ニ寇ス警士コレヲ却ク	緒方洪庵江戸ニ來リテ坪井信道ノ門ニ入ル時年二十二是時坪井ノ門日ニ多ク始テ「カランマナカ」及「センタキス」ノ兩文典ヲ講習ス	十一月醫方研幾刻成	
辛卯		宇田川玄眞致仕		
同三年		青地林宗水戸藩ニ聘セラレテ西學都講トナル		
壬辰		夏渡邊登其藩ノ家老トナリ尋テ封地ヲ巡視シ大洋ニ向フヲ以テ海防ヲ慮レリ		
二四九二				
一八三二				

天保十 四	二月高島四郎太夫ヲ江戸ノ獄ニ下ス	緒方洪庵扶氏經驗遺訓ヲ譯述シテ大ニ醫學ノ功ヲ進ム且始テ學科ノ等級ヲ建テ、門人ヲ教育ス	五月十三日玄長歿年六十二
癸卯		秋佐藤泰然堀田侯ニ召サレテ塾ヲ下總佐倉ニ開ク來リ學フ者頗多シ	
二五〇三 一八四三		正月伊東玄朴佐賀本藩ノ醫員トナル築作省吾近世西洋地誌ニ因リテ新ニ輿地全圖ヲ製シ又其誌ヲ譯述シテ坤輿圖識ヲ著ス實ニ佛國革命米國獨立以後ノ新地誌ナリ	十二月新製輿地全圖刻成
弘化元 甲辰	七月和蘭軍艦長崎ニ來リテ西洋諸國ノ來港ヲ上告ス		十二月六日甫賢歿年四十八
二五〇四 一八四四			
同二年	二月米利堅船浦賀ニ來リテ我漂氏ヲ送返ス	三月二十七日江戸ノ四獄火災ニ罹ル高野長英脫獄シテ往ク所ヲ知ラス	十一月二日立卿歿年六十
乙巳	七月翻譯書ノ出版ハ天文臺ノ許可ヲ得セシム	杉田成卿翻譯局ノ譯員トナル	
二五〇五 一八四五			
同三年	閏五月米船又浦賀ニ來ルコレヲ却シ六月佛蘭西船長崎ニ來ル	佐久間修理始テ洋書ヲ學フ先是江川ノ門ニ入リテ大ニ力ヲ西洋砲術ニ用ヰ尋テ開業シテ其術ヲ教授ス	九月萬國輿地方圖刻成
丙午	七月高島四郎太夫ヲ安部虎之助ニ付シテ禁錮セシム	筑前藩士永井助吉築作阮甫ニ學ヒテ是歲萬國輿地方圖ヲ著セリ	閏五月十日春山歿 六月廿二日榕庵歿 九月十三日具齋歿 十二月十三日省五歿
二五〇六 一八四六			
同四年	三月蘭製ノ大砲ヲ浦賀ニ備ヘ七月其奉行ノ格ヲ諸大夫トス	藤井三郎ハ芳亭ノ子夙ニ英學ニ志シテ英文範ヲ著セシガ中年病歿シテ其業ヲ果ササレトモ是ヲ英文ヲ讀ムノ始トス	十一月坤輿圖識刻成
丁未	九月孝明帝即位	緒方洪庵亦病學通論ヲ譯述シテ病因病證ヲ説ク病理書ノ始ナリ	
二五〇七 一八四七	冬米國ノ漂民七人ヲ蘭人ニ託シテ其國ニ送り返ラシム		

嘉永元	米國漂民十一人ヲ其國ニ送り返ラシム	先是和蘭文法ノ講習日ニ盛ニシテ此學ニ入ル者必先コレヲ熟讀セリ然トモ皆傳寫シテ其業ニ就ク故ニ築作阮甫校訂シテ和蘭文典ト名ケ其前編ヲ刻シテ既ニ世ニ公ニセリ是歲後編モ亦刻成レリ	九月和蘭文典後編刻成	八月二十八日藤井三郎歿 十一月八日信道歿 年五十四
戊申	高島流砲術ヲ西洋流ト改稱セシメ尋テ銃隊操練ニ當リテ其發砲スル事ヲ許ス	蘭醫ノ禁特ニ外科ヲ許スノ故ヲ以テ伊東玄朴等爭ヒテ桂川氏ノ門人トナル是ヨリ漢蘭兩醫互ニ相惡シ	四月病學通論刻成	
同二年	三月和蘭醫術ヲ禁ス且醫書ノ出版ハ皆醫學館ノ許ヲ受シム	江川太郎左衛門上書シテ砲術築城軍艦ノ三者ヲ整ヘテ外寇ニ備ヘント乞フ		
己酉	四月英船浦賀ニ來ル却之九月蘭文翻譯ノ應設社撰ヲ禁ス	二月林洞海其舊譯藥性論ノ出版ヲ醫學館ニ乞ヒシカ許サレズ 高野長英ノ脱獄セシヤ西南諸國ニ逃レ後竊ニ江戸青山ニ潛居シテ澤三伯ト改稱セリ是歲事顯ハレ捕縛ニ達シテ時目刃ヲ死ス		
二五〇九 一八四九	和蘭始テ牛痘苗ヲ傳ヘテ種之	川本幸民大ニ西洋究理ノ學ヲ講シ青地林宗ノ意ヲ擴メテ氣海觀瀾義ヲ著ス	四月氣海觀瀾廣義刻成	十一月十九日長英自歿年四十七
同三年	五月安ニ海防ノ策略ヲ唱フルヲ禁ス	土佐中ノ漁夫萬次郎漂流シテ米國ニ至リ留ル十年頗其國ノ文字言語ニ通ス是歲九月便ヲ得テ歸朝セリ		
庚戌				
二五一〇 一八五〇				
同四年	二月蘭製小銃五十挺ヲ長崎ヨリ浦賀ニ備ヘテ外寇ノ防禦トナス	三月下曾根金三郎浦賀ニ往キテ銃隊教授ヲ命ゼラル金三郎モ高島流砲術ヲ學ビシ者 佐久間修理ノ門砲術習練日ニ盛ナリ十一月修理用砲ノ理ニ基キテ砲卦ヲ作ル上木ヲ請ヒシニ許サレズ		
辛亥				
二五一一 一八五一				
同五年	五月武藏大森海濱ニ大砲放射場ヲ設ケ七月大砲演習ノ學ヲ			
壬子				
二五一二 一八五二	八月蘭人明年米船ノ來ルヲ告			

日本洋學年表

嘉永六 癸丑	六月米使彼理浦賀ニ來リテ通 信ヲ乞フ偶將軍薨ス故ニ許答 セシ米船去ル世子家定襲職 七月魯使長崎ニ來リテ通信キ 乞フ八月品川海ニ砲臺ヲ築キ 九月大艦ヲ造ルヲ許ス十月西 洋流術ヲ盛ニ演習セシム	八月高島四郎太夫免罪セラレテ江川ニ 屬シ海岸防禦方トナル 箕作阮甫長崎 ニ往キテ魯使感接ニ接待ス 十月市川 齊策作秋坪翻譯局ノ譯員トナル 十一 月中濱萬次郎官ヲシテ幕臣トナル 江 川下曾根ノ門銃隊操練日ニ盛ナリ是月 其號令ニ審詰ヲ用ケルヲ禁セラル	八月銃創預言刻 成	正月九日涼亭歿年 六十三
安政元 甲寅	正月魯船去リ米使再來ル三月 米國ト和親ヲ結ビ下田箱館ニ 入港スルヲ許ス七月英船長崎 ニ來ル亦其入港ヲ許ス 船旗 ニ日丸ヲ用キ且軍制ノ改正ヲ 令ス九月佐久間修理ヲ松代ニ 禁錮ス十二月魯船下田ニ來ル	四月佐久間修理門人ノ米國ニ潜航セシ トスルニ至シ遂ニ松代ニ禁錮セラレ五 月杉田成卿譯員ヲ辭ス 江川太郎左衛 門軍艦製造ノ命ヲ奉シ八月門生ヲ長崎 ニ遣リテ蘭人ノ傳習ヲ受ケシム 大艦 倭艦銃創預言ヲ著ス太郎左衛門其急務 ナルヲ以テ直ニ官ノ許可ヲ得テ刊行ス	八月銃創預言刻 成	二月二十五日太郎 左衛門歿年五十五
同二年 乙卯	正月講武所海軍操練所ヲ置キ 海陸ノ戰法ヲ演習セシム 翻譯局ヲ天文臺ヨリ移シテ丸 段坂下ニ置キ蘭書ヲ講セシム 八月薩州藩西洋製ノ大艦大元 丸ヲ獻ス是ヲ洋船製造ノ始ト ス和蘭モ亦蒸氣船ヲ貢セリ	五月下曾根ノ門人銃隊ヲ鼠山ニ操練ス 七月勝麟太郎失田堀景藏長崎ニ往キ蒸 氣船運用ヲ蘭人ニ學フ 九月箕作阮甫 將軍ニ謁シ譯員ヲ辭ス 先是トウ フ氏ノ對譯辭書ハ官用ニ藏シテ公行セ ス桂川甫周蘭學者ノ爲ニ屢請ヒテ遂ニ 出版ヲ許サレ訂正シテ和蘭字典ト名ク	正月藥性論刻成 十月人身醫理書 刻成	
同三年 丙辰	二月翻譯局ヲ舊書調所ト改稱 シ四月箕作阮甫杉田成卿ヲ教 授職トシテ衆教員ヲ置ク六月 譯書出版ヲ領ス 七月米使ハ リス下田ニ來ル 九月諸城門 ノ兵備ハ西洋銃ニ改裝セシム 十月外國事務總裁ヲ置ク	林洞海銃創預言ヲ上木セシニ因リ直ニ 藥性論ノ官許ヲ得テ始テ刊行セリ 先是甲斐人廣瀬元泰京師ニ居テ大ニ究 理學ヲ講シ理學提要人身醫理書ヲ著ス 江川ノ門益隆盛ナレハ新ニ操練場ヲ新 錢座ニ築キテ大ニ銃隊運動ヲ演習ス 十二月杉田成卿將軍ニ謁ス		
一八五六				

同四年 丁巳	正月舊書調所ノ開業式ヲ行ヒ 幕臣及諸藩士ノ入學ヲ許ス 十月ハリス江戶ニ來リ開港五 市ノ約ヲ議定ス十一月登城シ 將軍ニ謁シテ圖書ヲ上ル尋テ 魯英佛三國ノ使來ル皆其約ノ 如クシ更ニ和蘭ト條約ヲ結フ	五月伊東玄朴戸塚靜海等相謀リテ種痘 館ヲ内神田ニ建テ同業ノ衆醫常ニ相會 集セリ當時府下ノ蘭家醫八十餘人 閏五月松本眞順内命ヲ以テ長崎ニ往キ 和蘭海軍醫官カンハニ就キテ醫術ノ 傳習ヲ受ク	七月扶氏經驗遺 訓刻成	
同五年 戊午	七月外國奉行ヲ置ク 魯使登 城ス是月將軍病ム始テ蘭醫伊 東玄朴戸塚靜海内玄同等ヲ 侍醫トナシ衆醫官ニ令シテ和 蘭醫術ヲ兼學セシム將軍遂ニ 薨ス無嗣大老井伊直弼紀伊宰 相家茂ヲ迎ヘテ其職ヲ襲シム	玄朴等醫官トナルハ和蘭内科醫ヲ用キ ルノ始タリ於是種痘館ヲ官ニ納メ大規 模所池田多仲等教員トナリテ教授解種 痘三科ニ分テリ是歲館舍燒失セリ	八月和蘭字彙刻 成	
同六年 己未	正月横濱箱館長崎ヲ開港ス 五月種痘館ヲ下谷ニ新建シ醫 學ヲ講シ生徒ヲ入ル 六月米 魯英佛蘭五國條約書ヲ頒布ス 外國方ニ翻譯員ヲ置ク 十月 蝦夷地ヲ制キテ奧羽諸藩ニ賜 フ 十二月洋銀通用ヲ許ス	正月東條英庵幕臣トナリテ外國方ニ屬 ス 六月松本弘庵著作秋坪原田敬策高畑五 郎調所ノ教員ヨリ選レテ外國方ノ譯員 トナル		二月十九日成卿歿 年四十三
萬延元 庚申	正月新見村垣兩使節ヲ米國ニ 聘セシム軍艦奉行木村毅大元 九ニ乘リテ附行セリ六月舊書 調所小川町ニ移シ英佛兩學 及獨魯兩語學ヲ開シ七月英使 登城ス海軍生徒ノ入學ヲ許ス 十月種痘館ヲ種痘所ト改稱ス	勝麟太郎大元九ヲ運用シテ太平洋ニ實 地航海術ヲ演習シ米國桑港ニ至リテ歸 ル福澤諭吉亦木村氏ニ隨從シテ米國 ニ往ク 九月松本眞順長崎ニ病院ヲ建 テ和蘭ノ法ニ倣ヒ養生所ト云フ 十月大規模種痘所頭取トナル 十一月福澤諭吉外國方ノ譯員トナル		
二五二〇 一八六〇				

日本洋學年表

文久元	九月番書調所ニ物産局ヲ置ク 十月種痘所ヲ西洋醫學所ト改稱ス 長崎養生所ヲ精得館ト改メテ醫學本科ヲ講習セシム 又醫學傳習生ヲ置ク 十二月竹内松平兩使節ヲ歐洲ニ遣リ英佛魯等六國ニ歷聘セシム	十月伊藤圭介召レテ物産局教員トナル 蘭醫「ホートン」ヲ招キテ精得館ノ教師トス 是外國教師ノ始ナリ 伊東玄伯林研海ノ塚文海緒方洪茂等傳習生トナリ 「ホン」ニ長崎ニ從學ス 松本篤作福澤三譯員歐洲使節ニ隨行ス 大島圭介鉛活字ヲ創製シテ築城典型ヲ印行ス	四月九日俊齋歿年五十七
同二年	五月新校ヲ一橋門外ニ建テ、洋書調所ト改稱ス 西洋醫學所ニ舍密局ヲ置ク 步兵ヲ募リ騎兵砲兵ト三兵隊ヲ編成シテ佛國ノ兵式ニ依ル 又海軍生ヲ和蘭ニ遣リ且軍艦ヲ製造セシム	俊齋歿ス六月緒方洪茂大坂ヨリ召レテ傳習兼醫學所頭取トナル 榎本釜次郎赤松大三郎等和蘭ニ往キテ海軍術ヲ學ブ 玄伯研海等共ニ往キテ醫學ニ從事ス 七月松本良順醫學副頭取トナル 八月玄朴法印ニ叙ス十二月川本幸民調所教授職トナリテ阮甫ト共ニ幕臣トナル	
壬戌	二月洋書調所ヲ開成所ト改稱シ醫學所セ西洋ノ二字ヲ去ラシム 是月開成所ニ數學局ヲ置ク 三月將軍上洛ス 七月長崎ニ語學所ヲ建テ清蘭英佛魯ノ五國語ヲ講習ス後濟美館ト稱ス	神田孝平數學局ノ教員トナル 是ヲ西洋算術ヲ教科トスルノ始トス 洪茂歿ス 七月松本良順代リテ頭取トナリ大ニ醫學ノ制ヲ改正ス 八月高島四郎太夫洋砲流祖タルヲ以テ旗下ノ士班ニ列ス 伊藤圭介辭職シテ尾張ニ歸ル 市川文吉等ヲ魯國ニ留學ス	六月十日洪茂歿年五十四 同月十七日阮甫歿年六十五
同三年	正月朝廷更ニ外夷ノ事務ヲ幕府ニ委任ス先是攘夷說ヲ唱ル ノ徒朝廷ニ逼リテ幕府ノ開港ヲ責ム 京師ニ諸士議論大ニ起レリ故ニ去年使チ歐米ニ遣リテ鎖港ノ意ヲ達ヘシム 八月歸リ各國ノ言ハサルヲ上報ス	四月杉田鳳卿外國方譯員トナル 佐久間亮輔セラレテ幕府ノ召ニ應シ京師ニ至リテ盛ニ開國說ヲ唱フ 攘夷ノ徒コレヲ殺ス 十月箕作秋坪福澤諭吉共ニ幕臣トナル	七月十一日修理被殺年五十四
癸亥	二月洋書調所ヲ開成所ト改稱シ醫學所セ西洋ノ二字ヲ去ラシム 是月開成所ニ數學局ヲ置ク 三月將軍上洛ス 七月長崎ニ語學所ヲ建テ清蘭英佛魯ノ五國語ヲ講習ス後濟美館ト稱ス	神田孝平數學局ノ教員トナル 是ヲ西洋算術ヲ教科トスルノ始トス 洪茂歿ス 七月松本良順代リテ頭取トナリ大ニ醫學ノ制ヲ改正ス 八月高島四郎太夫洋砲流祖タルヲ以テ旗下ノ士班ニ列ス 伊藤圭介辭職シテ尾張ニ歸ル 市川文吉等ヲ魯國ニ留學ス	
二五二二	二月洋書調所ヲ開成所ト改稱シ醫學所セ西洋ノ二字ヲ去ラシム 是月開成所ニ數學局ヲ置ク 三月將軍上洛ス 七月長崎ニ語學所ヲ建テ清蘭英佛魯ノ五國語ヲ講習ス後濟美館ト稱ス	神田孝平數學局ノ教員トナル 是ヲ西洋算術ヲ教科トスルノ始トス 洪茂歿ス 七月松本良順代リテ頭取トナリ大ニ醫學ノ制ヲ改正ス 八月高島四郎太夫洋砲流祖タルヲ以テ旗下ノ士班ニ列ス 伊藤圭介辭職シテ尾張ニ歸ル 市川文吉等ヲ魯國ニ留學ス	
一八六三	二月洋書調所ヲ開成所ト改稱シ醫學所セ西洋ノ二字ヲ去ラシム 是月開成所ニ數學局ヲ置ク 三月將軍上洛ス 七月長崎ニ語學所ヲ建テ清蘭英佛魯ノ五國語ヲ講習ス後濟美館ト稱ス	神田孝平數學局ノ教員トナル 是ヲ西洋算術ヲ教科トスルノ始トス 洪茂歿ス 七月松本良順代リテ頭取トナリ大ニ醫學ノ制ヲ改正ス 八月高島四郎太夫洋砲流祖タルヲ以テ旗下ノ士班ニ列ス 伊藤圭介辭職シテ尾張ニ歸ル 市川文吉等ヲ魯國ニ留學ス	
二五二三	二月洋書調所ヲ開成所ト改稱シ醫學所セ西洋ノ二字ヲ去ラシム 是月開成所ニ數學局ヲ置ク 三月將軍上洛ス 七月長崎ニ語學所ヲ建テ清蘭英佛魯ノ五國語ヲ講習ス後濟美館ト稱ス	神田孝平數學局ノ教員トナル 是ヲ西洋算術ヲ教科トスルノ始トス 洪茂歿ス 七月松本良順代リテ頭取トナリ大ニ醫學ノ制ヲ改正ス 八月高島四郎太夫洋砲流祖タルヲ以テ旗下ノ士班ニ列ス 伊藤圭介辭職シテ尾張ニ歸ル 市川文吉等ヲ魯國ニ留學ス	
一八六四	二月洋書調所ヲ開成所ト改稱シ醫學所セ西洋ノ二字ヲ去ラシム 是月開成所ニ數學局ヲ置ク 三月將軍上洛ス 七月長崎ニ語學所ヲ建テ清蘭英佛魯ノ五國語ヲ講習ス後濟美館ト稱ス	神田孝平數學局ノ教員トナル 是ヲ西洋算術ヲ教科トスルノ始トス 洪茂歿ス 七月松本良順代リテ頭取トナリ大ニ醫學ノ制ヲ改正ス 八月高島四郎太夫洋砲流祖タルヲ以テ旗下ノ士班ニ列ス 伊藤圭介辭職シテ尾張ニ歸ル 市川文吉等ヲ魯國ニ留學ス	

慶應元	十月朝廷更ニ横濱箱館長崎ノ開港ヲ許ス 開成所ヲ陸軍奉行ノ所管トシ學科ニ理學化學ヲ置ク又精得館モ亦其兩學科ヲ置ケリ	蘭人カラタマ「ヲ」招キテ開成所ノ理化學教師トナス 先是開成所ノ教員トナル者津田真三宇都宮鑑之進加藤弘藏西周助津田真一郎箕作貞一郎等數人各其職ニ任セリ	正月十四日四郎太夫歿年六十九
乙丑	八月將軍大坂城ニ薨ス一橋中納言慶喜其職ヲ襲キテ二條城ニ居ル 是月使チ魯國ニ遣シテ津太島ノ經界ヲ定メシム 十一月開成所ヲ外國奉行ノ所管トス 大ニ海軍艦隊ヲ治ム	箕作秋坪等魯國使節ニ隨行ス 冬中村敬助箕作奎吾等十四人ヲ英國ニ留學ス 十月榎本釜次郎軍艦開陽丸ニ乘リテ歸朝セリ	
二五二五	八月將軍大坂城ニ薨ス一橋中納言慶喜其職ヲ襲キテ二條城ニ居ル 是月使チ魯國ニ遣シテ津太島ノ經界ヲ定メシム 十一月開成所ヲ外國奉行ノ所管トス 大ニ海軍艦隊ヲ治ム	箕作秋坪等魯國使節ニ隨行ス 冬中村敬助箕作奎吾等十四人ヲ英國ニ留學ス 十月榎本釜次郎軍艦開陽丸ニ乘リテ歸朝セリ	
一八六五	八月將軍大坂城ニ薨ス一橋中納言慶喜其職ヲ襲キテ二條城ニ居ル 是月使チ魯國ニ遣シテ津太島ノ經界ヲ定メシム 十一月開成所ヲ外國奉行ノ所管トス 大ニ海軍艦隊ヲ治ム	箕作秋坪等魯國使節ニ隨行ス 冬中村敬助箕作奎吾等十四人ヲ英國ニ留學ス 十月榎本釜次郎軍艦開陽丸ニ乘リテ歸朝セリ	
同二年	八月將軍大坂城ニ薨ス一橋中納言慶喜其職ヲ襲キテ二條城ニ居ル 是月使チ魯國ニ遣シテ津太島ノ經界ヲ定メシム 十一月開成所ヲ外國奉行ノ所管トス 大ニ海軍艦隊ヲ治ム	箕作秋坪等魯國使節ニ隨行ス 冬中村敬助箕作奎吾等十四人ヲ英國ニ留學ス 十月榎本釜次郎軍艦開陽丸ニ乘リテ歸朝セリ	
丙寅	八月將軍大坂城ニ薨ス一橋中納言慶喜其職ヲ襲キテ二條城ニ居ル 是月使チ魯國ニ遣シテ津太島ノ經界ヲ定メシム 十一月開成所ヲ外國奉行ノ所管トス 大ニ海軍艦隊ヲ治ム	箕作秋坪等魯國使節ニ隨行ス 冬中村敬助箕作奎吾等十四人ヲ英國ニ留學ス 十月榎本釜次郎軍艦開陽丸ニ乘リテ歸朝セリ	
二五二六	八月將軍大坂城ニ薨ス一橋中納言慶喜其職ヲ襲キテ二條城ニ居ル 是月使チ魯國ニ遣シテ津太島ノ經界ヲ定メシム 十一月開成所ヲ外國奉行ノ所管トス 大ニ海軍艦隊ヲ治ム	箕作秋坪等魯國使節ニ隨行ス 冬中村敬助箕作奎吾等十四人ヲ英國ニ留學ス 十月榎本釜次郎軍艦開陽丸ニ乘リテ歸朝セリ	
一八六六	八月將軍大坂城ニ薨ス一橋中納言慶喜其職ヲ襲キテ二條城ニ居ル 是月使チ魯國ニ遣シテ津太島ノ經界ヲ定メシム 十一月開成所ヲ外國奉行ノ所管トス 大ニ海軍艦隊ヲ治ム	箕作秋坪等魯國使節ニ隨行ス 冬中村敬助箕作奎吾等十四人ヲ英國ニ留學ス 十月榎本釜次郎軍艦開陽丸ニ乘リテ歸朝セリ	
同三年	正月德川氏部大輔昭武ヲ佛國ニ留學セシム 三月神戸港ヲ開ク 開成所ノ學制ヲ改正ス 十月將軍德川慶喜政權ヲ朝廷ニ奉還シテ大坂城ニ入ル	箕作貞一郎等德川昭武ト共ニ佛國ニ留學セリ 開成所ノ學制全ク外國教授法ニ倣ヒテコレヲ改正ス 此時蘭學漸ク衰ヘテ英佛獨ノ三學日ニ隆盛ナリ	
丁卯	正月德川氏部大輔昭武ヲ佛國ニ留學セシム 三月神戸港ヲ開ク 開成所ノ學制ヲ改正ス 十月將軍德川慶喜政權ヲ朝廷ニ奉還シテ大坂城ニ入ル	箕作貞一郎等德川昭武ト共ニ佛國ニ留學セリ 開成所ノ學制全ク外國教授法ニ倣ヒテコレヲ改正ス 此時蘭學漸ク衰ヘテ英佛獨ノ三學日ニ隆盛ナリ	
二五二七	正月德川氏部大輔昭武ヲ佛國ニ留學セシム 三月神戸港ヲ開ク 開成所ノ學制ヲ改正ス 十月將軍德川慶喜政權ヲ朝廷ニ奉還シテ大坂城ニ入ル	箕作貞一郎等德川昭武ト共ニ佛國ニ留學セリ 開成所ノ學制全ク外國教授法ニ倣ヒテコレヲ改正ス 此時蘭學漸ク衰ヘテ英佛獨ノ三學日ニ隆盛ナリ	
一八六七	正月德川氏部大輔昭武ヲ佛國ニ留學セシム 三月神戸港ヲ開ク 開成所ノ學制ヲ改正ス 十月將軍德川慶喜政權ヲ朝廷ニ奉還シテ大坂城ニ入ル	箕作貞一郎等德川昭武ト共ニ佛國ニ留學セリ 開成所ノ學制全ク外國教授法ニ倣ヒテコレヲ改正ス 此時蘭學漸ク衰ヘテ英佛獨ノ三學日ニ隆盛ナリ	
同四年	三月醫學所ヲ海陸軍病院トナス 開成所ハ國事多端ナルヲ以テ開校ス 八月海軍艦隊皆東走セリ 八月今上即位九月明治ト改元 ス先是江戸ヲ以テ東京トナス	神田孝平柳河春三共ニ開成所頭取トナル 先是頭取ノ職皆旗下ノ諸臣タリシカ始テ學士ヲ任セリ 四月松本良順脫走セシヲ以テ林洞海假ニ病院ノ取締トナル 海外ノ留學生國變ヲ聞キテ皆歸ル 德川昭武モ亦歸朝セリ	
戊辰	三月醫學所ヲ海陸軍病院トナス 開成所ハ國事多端ナルヲ以テ開校ス 八月海軍艦隊皆東走セリ 八月今上即位九月明治ト改元 ス先是江戸ヲ以テ東京トナス	神田孝平柳河春三共ニ開成所頭取トナル 先是頭取ノ職皆旗下ノ諸臣タリシカ始テ學士ヲ任セリ 四月松本良順脫走セシヲ以テ林洞海假ニ病院ノ取締トナル 海外ノ留學生國變ヲ聞キテ皆歸ル 德川昭武モ亦歸朝セリ	
二五二八	三月醫學所ヲ海陸軍病院トナス 開成所ハ國事多端ナルヲ以テ開校ス 八月海軍艦隊皆東走セリ 八月今上即位九月明治ト改元 ス先是江戸ヲ以テ東京トナス	神田孝平柳河春三共ニ開成所頭取トナル 先是頭取ノ職皆旗下ノ諸臣タリシカ始テ學士ヲ任セリ 四月松本良順脫走セシヲ以テ林洞海假ニ病院ノ取締トナル 海外ノ留學生國變ヲ聞キテ皆歸ル 德川昭武モ亦歸朝セリ	
一八六八	三月醫學所ヲ海陸軍病院トナス 開成所ハ國事多端ナルヲ以テ開校ス 八月海軍艦隊皆東走セリ 八月今上即位九月明治ト改元 ス先是江戸ヲ以テ東京トナス	神田孝平柳河春三共ニ開成所頭取トナル 先是頭取ノ職皆旗下ノ諸臣タリシカ始テ學士ヲ任セリ 四月松本良順脫走セシヲ以テ林洞海假ニ病院ノ取締トナル 海外ノ留學生國變ヲ聞キテ皆歸ル 德川昭武モ亦歸朝セリ	

考據書目 表中記載スル所ノ書且王父ノ遺著ハ其書目
載セテ追遠會志ニ在リ故ニ再記セス

太平年表	同續表五編	歐南遣使考	新井白石傳	林子平傳並碑文
武江年表	同續表	金城秘鑑	西川如見傳	伊能勘解由傳
東府年表		推氏記念塔勸進記	青木文藏行狀	渡邊登傳並小傳
長崎年表		瀛環志略	前野良澤傳並碑文	高野長英行狀並傳
信長譜		輿地志略	杉田玄白行狀	小關三英碑文
秀吉譜	同續譜	文部省第一年報	桂川甫周傳並碑文	鈴木春山傳
長崎志	同續譜	醫學所沿革書	大槻玄澤行狀並碑文	佐久間修理傳
野史纂略	同續譜	砲術原始來歷書	宇田川玄隨碑文	大槻家譜
近世外史		德丸原練兵記事	同 玄眞碑文	江川系譜
近世事情		沿海實則錄附記	坪井信道碑文	高島由緒書
先哲叢談	同續篇	林子平俗履	緒方洪庵碑文	杉田由緒書
近世叢語	同續篇	藏賦	吉田長淑碑文	高島由緒書
先民傳		平賀記	足立長傳碑文	林子平罪告
皇國名醫傳		浮世繪類考	佐藤泰然略傳	高橋作左衛門罪告並連坐
北陸紀愛		書圖西遊談	伊東玄朴行狀	渡邊登高野長英罪告並連坐
沿海紀聞		驅豎齋詩文抄	戸塚靜海行狀	高島四郎太夫罪告並連坐
聞のまにまに		象山文錄	大槻俊齋碑文	佐久間修理罪告
長崎夜話草		文學雜誌	小石元俊傳	
薩摩風土記		洋々社談	藤林泰介行狀	
對治邪執論		昨夢詩曆	馬場佐十郎碑文	
著賊排攘譯說		寧靜閣雜纂	青地林宗碑文	
吉利支丹書抄			築作阮甫碑文	
羅馬人獄狀			同 省吾碑文	
彼理日本紀行				

以上一百零七種表中著書八十種合計一百八十七種
其中家藏セサル者僅ニ十六種ノミ

わら王父磐水翁とはやくより和蘭のぬみよむあとう志されやうて蘭學階梯といへる書を
作られたり是を我ら日の本よつ國學ひの開け來し始なる今なほ家よあまた遺れる書と
もを見るる醫術本草などいふ書と外つ國の事實地理の書をも皆蘭の書より譯し記るされ
たるなり此頃ては此學ひ道の調てぬ時なるまかくもものせられたるいとしみさおそ
と思ひ遣られたり又杉田のうしの王父も賜へる蘭學事始といふ書を讀みてていやまし
貴くおそおほゆれ今の世の人々横文字を讀み習ひし上てたやぞく譯書をもものぞるよつ
ても古人のいたつき知らてやてあるへきさるうらよの道の傳てり來し故よしをかきあ
つめて日本洋學小史といふ書を作らとやと思ふものくら據り處とせんもとつ書の多
らぬよせんすへなくもたしたりき去年の秋て王父身られしより五十年よはたりたれか
そのうしと弟文彦も謀りて御靈祭して此道の學士たちを集へやりて其おとゝもをかきつ
りて追遠會誌といふ書をものせりさて思ふよりゝる時たふ始の心よたち返らとてい
うてよぎとりあらんやと思ひおほしてあけくれいちまちのくまなくめぐりつゝぬるさ
書とをも購ひ集めてもてものもとつ書とをあれを表中に記せし書と考據書目なるかくて
或ひて其墓處を探りて苔むしたる文字を寫しあるひて其寺僧も頼て過去帳をくりくへ
く或ひて舊き家々を訪ひて其家譜を考へ又年たけたるうしたちよはとてぞのうとの
おとゝひ聞きなとして一とせあまり過しぬれてものおほよそとゝのひぬれとなほはた
きものとななりけりもくゝ歴史といふものゝ基と建つへきて年立よて同じ事のあ

とさきならぬとむねとを聞きつれてはつ外つ國人のほる來をめしよりあつたの年月を記して、此表を記しけるなりとて世の人のためと今の物學ひのものと道を知つたよりよもなしつ又わくしこととておのゝ家のぬる事と後の世に傳ふるゐなれと王父の御靈も悦とせしむいぬへくとてを記して此書はくらんとて訪ひまゐらせてぬるゐと聞ゝし人々て竹内風香林洞海伊藤圭介みゐりのち杉田桂川宇田川坪井の四家吉田高須淺越の氏々松本大島勝横山箕作福澤の學士とて學ひの友とて川本片山のぬゝり常と交れる中よて關根月岡の兩氏よをありけるされど此書のかく成り終へるも半と此人々のいことをといひつゝしかくて今年官家と内國勸業博覽會を開かれしを好き時の來あひぬと思ひてむめもとせらる勤めをしてみつゝ此年表をいと大きなかけ物と調へて其場に出しつ又このありまきよせしなほこの中漏れとて誤れる事おほらんを世の物知り人は問ひたゝしてかの洋學小史を作り果さん心おれこの書見たまてん人々て違へるかゝ誤れるふじゝをしまとてゝたまてらん事をあそ

東のみことのおほみたらと大槻修二と

補正

年號	原文	正誤	脱字	衍字
○前記 大永元年 弘治元年 元龜二年 慶長十九年寛永元年 元和二年 寛永九年 慶安三年 ○正記 享保三年官事 安永元年學事 同 九年同 天明元年生卒 同 三年學事 寛政六年同 同 九年同 同 十一年同 同 年生卒 文政七年學事 同 九年十年同 弘化三年學事 嘉永四年同 安政三年同	一千五百〇十九年 鐵人テウシクナト 亞媽 耶○教 與ヒ 船東〇〇〇ト 造ラシ〇タリ 桐山正哲〇 ○蘭譯箋 藤林泰輔 衆士 祝 檜林重兵衛ノ 説 箕作玄甫 シイホルト〇 伊東圭介 與地方圖ヲ著セリ 土佐中〇ノ 瑣言ヲ	テウシクナト 阿 與 介 世 祝 説 伊 瑣 言	七 蘇 貢 使 和 等 氏 中 濱	

安政五年同	玄朴等○	等ノ	
萬延元年同	傲ヒ	做ッ	
文久三年同	市川文吉チ		
元治元年同	佐久間○	修理	
慶應二年同	十四人チ		
例言第二則	傳へ來シ、者		
同 第十則	詳説		
序論	伊東冲齋		
跋文第九行	王交身○かれ	身まられ	

逸事

○天文十二年 大友宗麟其臣齋藤源助ヲ葡萄牙ノ本國ニ遣リテ贈遺ノ報チナス源助其國ニ病死ス

○同 二十年 魯西亞人「カムシヤツカ」地方チ發見シテ屬地トナシ次第ニ「クリル羣島」及ホス

○天明八年學事 林子平長崎ニ至リテ和蘭人ニ海外ノ事情ヲ問フ

○同 五年同 林子平朝鮮琉球蝦夷地無人島ノ圖説チ作リテ三國通覽ト云フ

○天保七年生卒 正月十四日泰介歿年五十六十一月廿六日長駕歿年六十一

此表ハ本年三月九日內國勸業博覽會ニ出サン事チ乞ヒ原稿チ定整シテ四月六日前記先成リ五月十一日出品ノ許可ヲ得タリ七月一日正記稿チ脱ス其二十五日前記チ繕寫シテ開場ノ期ニ備ヘ全編ノ刻成チ開場前ニ約ス既ニシテ竊ニ思フニ書冊ニシテ題名ノミヲ顯ハスモ書中ノ記事ヲシテ一目ノ下ニ瞭然ナラシムル能ハスト因テ更ニ正記チ一幅ニ裝製シテ官事學事等ノ四層チ列序シ九月二十二日再許ヲ得テ二十八日新ニ會場ニ掲ケタリ爾後尙稿本調理ノ功チ費ス者一月有餘十一月十一日ニ至リ始テ活版印行ニ付スル事チ得タリ而テ製本ノ成ルハ其三十日午前十時ニシテ恰開場式ノ本日ニ當レリ故ニ中間僅々二十日ナレハ忽卒ノ際コノ許多ノ誤脱チ生セリ今復校閲シテ此補正チ附セリ然トモ尙正誤チ盡ス能ハサルヘシ覽者ソレヲ諒セヨ

大槻修二再記

明治十年六月十九日版權免許
同年十一月三十日出版

著述出版人

東京府平民

大槻修二

淺草北富坂町
三十四番地

日本橋通二丁目

賣弘書林

稻田佐兵衛

小林新兵衛

印刷所

淺草森田町
擴令社

